

教育研究業績書

2025年10月20日

所属：日本語日本文学科

資格：教授

氏名：寺島 修一

研究分野	研究内容のキーワード
中古中世の日本語日本文学	歌学 六条家 御子左家 藤原清輔
学位	最終学歴
博士（文学）,文学修士,文学士	大阪市立大学大学院 文学研究科 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 授業に関するアンケートの利用	2010年	講義科目について、毎時アンケートを行って、授業の理解度を把握するとともに、質問事項については次の時間に答える。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 院政期歌学の形成と 享受	単	2004年12月		本稿は院政期の歌学をめぐる享受と形成の諸相について論ずる。およそ文学作品の形成は文学作品の享受と一体であり、先行する作品の享受が新たな作品形成を促す。そうした享受と形成の連鎖を院政期の歌学を軸に見ようとするのが本稿の目論見である。
3 学術論文				
1. 『奥義抄』と範兼説 の関係について	単	2016年3月	文学史研究	
2. 『口伝和歌釈抄』の 性格—成立と享受の 一面—		2011年03月	文学史研究	
3. 『口伝和歌釈抄』所 引「万葉」歌の性格 —『人麿集』との関 係から—	単	2010年12月	国語国文	
4. 藤原定家「源氏名 所」攷—掲出地名と 配列について—	単	2008年12月	武庫川国文	
5. 御子左家相伝の『万 葉集』の形態	単	2005年03月	武庫川国文	
6. 歌道家と万葉集の伝 来 一卷二十の末尾	単	2001年11月	片桐洋一編『王朝 文学の本質と変容』	俊成から定家に相伝された『万葉集』がどのような形態と性質を有する本であったのかについて考察した。俊成の『万葉集』観の変遷をたどり、基俊本の校合注記が俊成本を経て広瀬本に残されていると考えた。 院政期には『万葉集』卷二十の末尾九十余首を欠く本が伝来してい

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
を欠く本をめぐって —			韻文編』 和泉 書院	た。この本は藤原俊成らによって「証本」として重視されていた一方で、顕昭は「偽本」と断じている。この本は明らかに不自然に末尾を欠いた状態になっているが、結果的にその形態は俊成らの支持していた『万葉集』聖武勅撰説に合致し、顕昭の平城天皇勅撰説とは相容れない。このことがこの本に対する評価を分かれさせた理由であると推定した。全 (pp. 20)
7. 『真名本伊勢物語』 の性格—用字をめぐ る注釈史的背景につ いて—	単	2000年12月	武庫川国文 56号	『真名本伊勢物語』のいくつかの用字について、歌学書や『伊勢物語』古注を参照して考察を加えた。従来の指摘に例を追加し、真名本の義訓には注釈書類に由来するものが少なくないこと、表音的な表記（訓仮名・音仮名）と見なされてきた例の中には、注釈書類を参照することで、表記どおりに解せるものがあること、また、そうした古注的な読みが注釈書類に見えない用字にまで波及していることなどを示した。全 (pp. 15)
8. 注釈と古辞書—「い ささめ」の周辺—	単	1999年12月	井手至先生古稀記 念論文集 国語国 文学藻（和泉書 院）	室町時代になって初めて古辞書類に収載される語の一つに「いささめ」がある。その表記としては「聊」「早目」「只暫」の三種が見られる。「いささめ」は歌語であり、本来的に漢字表記になじまない。古辞書に見られる表記は全て歌語注釈に由来する。それぞれの表記が歌語注釈の中でどのような形で成立してきたのかについて考察し、注釈と古辞書との関わりの一例を示した。全 (pp. 14)
9. 『奥義抄』注説の形 成—『俊頬脳』と の関わりから—	単	1999年11月	武庫川女子大学文 学部五十周年記念 論文集（和泉書 院）	藤原清輔は『奥義抄』の述作において『俊頬脳』に多くの部分を依拠しながら、『俊頬脳』の特色たる説話への傾斜を切り捨てている。説話の細部の把握よりも、出典に関する知見を充実させ、歌学における正当な説を探し、例証を付加する。『俊頬脳』の、和歌から離れて拡散した世界を、再び和歌に向けて捉え返そうとする求心的なあり方を示している点において、『奥義抄』の和歌注釈の志向が確認される。全 (pp. 12)
10. 清輔の歌学と『俊頬 脳』—『袋草紙』 を中心には—	単	1999年06月	大阪市立大学文学 部創立五十周年記 念国語国文学論集 （和泉書院）	藤原清輔の歌学書『袋草紙』は、『俊頬脳』を参照して著述されている。その利用のあり方は、『俊頬脳』を批判するときには、それが俊頬説であることを明記し、俊頬説を認める場合には誰の説とも明記しないという形である。このような利用の仕方は、博引傍証をもって知られる『袋草紙』の中で、『俊頬脳』がその歌学知識の根幹に位置し、その著述を導くような一面をもっていたことの表われとして評価することができる。全 (pp. 12)
11. 「処女塚」と「求 塚」—謡曲《求塚》 小考—	単	1998年01月	『阪神間の文学』 和泉書院	生田川伝説を素材とした謡曲に《求塚》がある。曲名となった「求め塚」という塚の呼称は『万葉集』に見えず、『大和物語』の六条家系統の伝本に見え、それには解釈上の問題点が絡んでいる。「求め塚」は源俊頬が『堀河百首』で詠みこんで以来、『歌枕各寄』『詞林采葉抄』といった中世の歌学注釈書類に見出されるようになり、《求塚》が作られた時代には「求め塚」が塚の呼称として一般的になっていたと認められる。全 (pp. 12)
12. 『奥義抄』と『俊頬 脳』—清輔の著述 態度について—	単	1997年12月	武庫川国文 50号	『奥義抄』は『俊頬脳』を利用して注説を形成しているが、『俊頬脳』の注説に対する評価により引用の形式は異なっている。また、万葉歌の引用に際して、注説が『俊頬脳』を承けている場合には『俊頬脳』本文をそのまま用いている。清輔が『奥義抄』に加えた改訂は、『俊頬脳』の誤りを訂正する形で行われる場合がある一方で、注説の内容を改訂する際には再び『俊頬脳』を参照したふしが見受けられる。全 (pp. 16)
13. 『奥義抄』古歌詞の 『万葉集』享受	単	1997年03月	武庫川国文 49号	藤原清輔の歌学書『奥義抄』には歌語の一覧とその簡略な語注からなる古歌詞という項目があり、その前半部には歌語に『万葉集』における表記が添えられている。それらの歌語は『古今集』歌に見える注意すべき歌語と、『堀河百首』に詠みこまれるような詠作に関わる万葉語とに大別される。これは清輔の『万葉集』に対する意識

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
14.『奥義抄』の『万葉集』享受－和歌本文の性格について－	単	1995年12月	文学史研究36号	の反映ととらえられ、漢字本文の重視が清輔の『万葉集』享受の特徴であると見なされる。全 (pp.18)
15.『温故知新書』引書攷－『仲文章』の場合－	単	1993年12月	文学史研究34号	藤原清輔の歌学書『奥義抄』に引用される『万葉集』本文を検討し、その結果、清輔が用いていたのは、現存本とはやや異なる『類聚古集』であることを確認した。この結果は他の清輔の著作における引用傾向とも符合する。当時、現存本とは異なる『類聚古集』が存したことは、顕昭の歌学書に認められる。また、『俊頬體脳』を代表として『万葉集』伝本に依らない引用も認められるが、清輔の改訓と認めるべき例はほとんどない。全 (pp.16)
16.注釈と古辞書（二） －「勝〔げに〕」 「寧人〔うたかたびと〕」について－	単	1992年12月	文学史研究33号	『温故知新書』に見える出典注記「仲」は、平安時代に成立の教訓書『仲文章』を指す。その所引本文を手がかりに『仲文章』享受のあり方を確認した。利用された本文は静嘉堂文庫本に近いと見られるが、なお『仲文章要文』に近いと見られる点もあり、直接には抄出本が参照された可能性がある。また、『温故知新書』の注記には『仲文章』読解の痕跡を残したと見られる例があり、『仲文章』享受の具体相を伝えるものとして注目される。全 (pp.11)
17.注釈と古辞書－『温故知新書』を中心に－	単	1992年04月	国語国文61巻4号	古辞書の用字において、字義と訓との対応に著しい齟齬を生じている場合、問題の語彙の古典注釈書における理解を確認することで、その齟齬の生ずるまでの経緯を明らかにしうることを示した。「げに」に「勝」をあてる用字は、『万葉集』の訓読における歌学書の錯誤に加えて、別語との混交が起こったために成立したものである。また、「うたかたびと」に「寧人」をあてる用字は、『後撰集』の注釈史を考慮することにより理解できる。全 (pp.16)
室町時代の辞書『温故知新書』における標出語彙の出典注記を手がかりに、その用字表記には『古今集』『伊勢物語』などの古典注釈書が利用されていることを確認した。出典として利用されているのは、本文本説を多く載せることを特徴とする一連の注釈書であり、また、その所説をふまえた連歌学書までが含まれる。このことは、当時の辞書編纂における語彙並びに用字の選択に、古典注釈書が深く関わっていることの証左となる。全 (pp.22)				
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1.『奥義抄』と範兼説の関係について	単	2015年12月		
2.『口伝和歌釈抄』の性格	単	2010年07月		
3.顕昭歌学の姿勢－「土民」説の扱いについて－	単	2006年04月		顕昭の歌学書には釈義の中で「土民」「案内者」などの説を用いて、文献に拠らない情報に触れることがある。特に「土民」は院政期歌学書の中でも顕昭歌学書にその用例が目立つ。顕昭の複数の歌学書に順次目を通しつつ「土民」についてやや子細に検討を加えることで、顕昭自身の歌学に対する姿勢の一面をとらえようとした。
4.『奥義抄』の注釈姿勢－『俊頬體脳』との関連から－	単	1997年04月		『奥義抄』の注説の形成には『俊頬體脳』が深く関わっており、『俊頬體脳』の所説は、注説の引用の仕方、万葉歌の本文、内容の改訂など、『奥義抄』の述作の様々な局面に関与が認められる。それらを踏まえて『俊頬體脳』との比較から『奥義抄』の注説を分析すると、清輔の歌学は、本文本説を正確に理解し、それに沿った語義用法を確定して、和歌を理解し、あるいは作歌に活かそうとするものだったととらえられる。
3. 総説				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 基盤研究（C） 繙 続	共	2013年		古代和歌における定型と歌体認識の発達過程の研究 研究分担者
2. 基盤研究（C） 繙 続	共	2012年		古代和歌における定型と歌体認識の発達過程の研究 研究分担者
3. 基盤研究（C） 新 規	共	2011年		古代和歌における定型と歌体認識の発達過程の研究 研究分担者
4. 基盤研究（C） 繙 続	単	2006年		院政期から鎌倉初期の歌学書及び歌道家における『万葉集』享受の 研究
5. 基盤研究（C） 新 規	単	2005年		院政期から鎌倉初期の歌学書及び歌道家における『万葉集』享受の 研究
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
	国語学会 和歌文学会 中世文学会			